遊戯王　アルカナソウル

キャベツ王子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王　アルカナソウル

【Ｎコード】
Ｎ８００６Ｙ

【作者名】
キャベツ王子

【あらすじ】
普通のアカデミア受験生鳴上　総司。だがアカデミアの試験に行く途中で奇妙な夢を見てしまい…。
アカデミアで新たな出会い、さまざまな出来事が彼を成長させていく、そんな物語。

試験というのは遅れると基本不利

「眠い…」

俺の名前は鳴上総司。デュエルアカデミアの受験生だ。デュエルアカデミアと言うのはプロデュエリストを養成する所だ。

で、今日はそのデュエルアカデミアの試験、電車に乗って試験場へと向かっている途中。

昨日遅くまでデッキ調性をしていたためか凄い眠い、このままオリンピックの日まで眠りたい、そんな気分だ。

「駅まで…あと…１０分…寝るな俺……でも５分ぐらいなら…ｚｚｚ」

俺の意識は暗闇へと落ちた。

ーーーーーーーーーーーーー

「お待ちしておりました」

「…Ｗｈｙ？」

目の前にはゴスロリ服をきた俺と同じぐらいの年頃の少女がいた。

問題は今いる場所だ。ゴスロリ服が似合わない和室…しかも戦国時代の武将が座っていそうな広い部屋だ。

もしかしてあれか？電車の中で寝ていた俺を誘拐したのか？それだと俺やばくないか？

…それはないか。

「ご心配召されずに。現実のあなたは眠っているだけ、ここは夢の世界だとお考えて下さい」

「・・・」

…頭が痛くなってきた。

「失礼。自己紹介が遅れました。私（わたくし）、キャサリンと申します。以後お見知りおきを。

「はぁ…俺は鳴上総司です…」

キャサリンが丁寧に喋るので、つられて俺も丁寧になってしまう。

「突然お呼び立てして申し訳ありません。実はあなたに話しておかないといけない話がありますので」

「話って？」

「あなたにある力の素質があるのです。ですが、あくまで素質、その力に目覚めるかどうかはあなた次第。私はその力を持つ者を導くのが私の役目で御座います」

力…？素質…？まるで意味がわからんぞ！

「今は分からなくて結構。しかし、ここでは何でも調べる事が出来ますので、調べ物が出来ましたらこの鍵を使い、ここにいらっしゃって下さいませ。私が力になりましょう」

「それではごきげんよう」といいキャサリンは指パッチンをする。すると俺の意識がうっすらと消えていく

ーーーーーーーー

「…ん…」

目が冷めると電車の中、椅子に座っていた。

それにしても…なんだ今の夢…？ホント疲れてんかな…？ま、たちの悪い夢だと思って忘れるか…

…そう言えば今どこの・・え・・・き

「…！？」

まずい…電車降りる駅通りこしているだと…！？

「やばいって！」

不幸中の幸いか、電車は駅で止まっていた。降りて電車に乗れば間に合うか？

考える前に全速力で電車を降りていた。

ーーーーーーーーー

「ぜぇ…ぜぇ…」

ぎりぎり…か？

「９０番！鳴上総司！いないのか！？」

「はいはい！！います！今行きますから！ぜぇぜぇ…」

くそッ…今日は災難だな…そう言えば…必勝祈願で行った神社でおみくじ日居たら大凶だったけ？

「ダメだ！ダメだ！そんなん考えてたらホントに落ちるって！」

ダメだ…疲れて上手く頭が上手く回らない…。おかげで変な目で見られてるよ…

「おい、大丈夫か？」

「あ？」

凛とした声の主は赤い髪のポニーテールの女性だった。

「酷く疲れているようだが…」

「大丈夫、大丈夫！でも、心配してくれてありがとう。じゃ！急いでるから！」

俺は今日行われる実技試験の会場へと走った。

「待たせたねお姉ちゃん」

「別に待っていない。試験はどうだった？」

「…あんなのただのザコキャラよ。」

「そうか、じゃあそろそろ行こうか」

二人の姉妹は総司が走った逆の方へ歩き出した。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「遅いのーネ！」

「ぜぇ…ぜぇ…すんません！」

会場にいたのは黄色いおかっぱだった。

「ペナルティとしてデュエルアカデミア実技最高責任者である私が相手をするノーネ！」

「まじっすか…ぜぇ…ぜぇ…」

ダメだ…今日は本当にダメな日だ、人生で二、三番目に不幸な日だ…

「さっさと用意するノーネ！」

「ぜぇ…ぜぇ…こうなりゃやけだ！」

俺は素早くデュエルディスクを装着する。昨日徹夜してまで改良したデッキをデュエルディスクに入れる。

「「デュエル！！」」

総司ＬＰ４０００
おかっぱＬＰ４０００

「先行は譲ってやるのーネ！」

「あざっす！俺のターン！」

手札は…上々、まだましな手札だ。

「【磨破羅魏】を召喚！このモンスターの効果は次の俺のドローフェイズにデッキトップを確認し、デッキの一番上か下におく事が出来る！」

【磨破羅魏】
ＡＴＫ１２００

「俺はこれでターンエンド。そして【磨破羅魏】はスピリットモンスター。自身の効果により手札に戻る。さぁ、どっからでもどうぞ！」

「フィールドをがら空きにするなんてなめてのでっす―カ！？私のターン！フィールド魔法【歯車街】を発動を発動するノーネ！更にカ

ードを二枚伏せ、【大嵐】を発動するノーネ！」

二枚の伏せカードと歯車だらけの街が嵐によって破壊される。

凄く嫌な予感しかしない…

「破壊された【歯車街】と伏せカード二枚の【黄金の邪神像】の効果を発動スルーの！まずは【歯車街】の効果により、デッキから【古代の機械巨竜】を特殊召喚するノーネ！次にセットされていた【黄金の邪神像】破壊された事で【邪神トークン】を特殊召喚するノーネ！」

【古代の機械巨竜】
ＡＴＫ３０００

【邪神トークン】×２
ＡＴＫ１０００

「まだまだですーノ！二体の【邪神トークン】を生贄に捧げ、来るノーネ！【古代の機械巨人】！」

【古代の機械巨人】
ＡＴＫ３０００

攻撃力３０００のモンスターが二体…流石に実技の最高責任者って事はあるな…。この絶望的な状況から観客席からは「終わったな」と思っていそうな顔をしている人がほとんだ。

「これで終わりナノーネ！二体のモンスターでダイレクトアタックするノーネ！」

まずは【古代の機械巨人】が俺に殴りかかってきたが、その攻撃は鐘を持った悪魔のようなモンスターに防がれる。

「何なのーネ！？」

「相手からの直接攻撃を受けた事により、手札から【バトルフェーダー】の効果が発動！バトルフェイズを終了させ、このカードを特殊召喚！」

【バトルフェーダー】
ＤＥＦ０

「焦っちゃだめですよ先生」

「ぐぬぬ…、ターンエンドナノーネ！」

「俺のターン！【摩破羅魏】の効果により、デッキトップを確認する」

デッキトップのカードは【聖なるバリアーミラーフォース】…。アンティーク・ギアシリーズにはほとんどの攻撃反応型のトラップには効かない…よって今の状況では無意味のカード…

「俺は確認したカードをデッキの一番下に置く。そしてドロー！！フッ…」

悪いなおかっぱ先生…俺の勝ちだ…！

「【バトルフェーダー】を生贄に捧げ、【砂塵の悪霊】を召喚！こ

いつは召喚成功時、フィールドに存在するこのカード以外の表側表示モンスターをすべて破壊する！サンド・ストーム！」

【砂塵の悪霊】が砂嵐を起こし、おかっぱ先生の二体の機械族モンスターは砂まみれになり、機能停止する。

「ななんですーと！？」

「手札のスピリットモンスター【伊弉波】を除外し、手札から【伊弉凪】を特殊召喚！」

【砂塵の悪霊】
ＡＴＫ２２００

【伊弉凪】
ＡＴＫ２２００

「バトル！【砂塵の悪霊】でダイレクトアタック！更に【伊弉凪】もダイレクトアタック！ブレイブ・ザッパー！」

「ぺぺロンチぃノぉぉぉ！」

おかっぱ
ＬＰ４０００→１８００→０

「試験の結果は後日通達するノーネ…」

「はいですーの…じゃなくて、了解です！ありがとうございました」

ふぅ…緊張したな…実技の最高責任者ッていうぐらいだから負けるかと思ったけど、なんとか勝てた。受験生だから手を抜いてくれたのか？

「よ！お疲れさん！」

「悠か、ありがとさん」

有里　悠。俺の昔からよくつるんでる奴だ。どんな奴かって聞かれると、友達思いな奴だな。

「…？今日は愛華と一緒じゃないのか？」

「用事があるから試験が終わってすぐ帰った。なんの用事かは聞いてないけどな」

愛華というのは悠と同じ孤児院で暮らしてる女の子だ。ついでに言うと悠の恋人だ。「爆発しろ」

「なんか言ったか？」

「別に。誰も爆発しろとは言ってませんが」

「敬語になってんぞ！それに爆発しろってなんだ！？」

「そんなのはどうでもいいから腹減った。マック行くぞ」

「無視すんなぁああ！」

マックへ向かう途中俺と同じ様に遅刻したのか走っている奴がいたけど、そいつの話はまた別のお話…。

試験というのは遅れると基本不利（後書き）

今回の最強カード

伊弉凪（イザナギ）／Ｉｚａｎａｇｉ》　†

効果モンスター

星６／風属性／天使族／攻２２００／守１０００

このカードは手札のスピリットモンスター１体をゲームから除外し、手札から特殊召喚する事ができる。

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に存在するスピリットモンスターはエンドフェイズ時に手札に戻る効果を発動しなくてもよい。

総司「スピリットモンスター関連で優一特殊召喚が出来るモンスターだ。【雷帝神】が倒せない【サイバー・ドラゴン】を倒せるという中々使えるモンスターで、スピリットモンスターを維持出来る効果を持つ。ちなみに俺のフェイバリットカードだ」

主人公と注意

鳴神　総司
年齢…１５歳
性別…男
身長…１７０ｃｍ
使用デッキ『スピリット』

見た目は…ペルソナ４の男主人公だと思って下さい。
どこにでもいる一般のアカデミアの受験生…のはずだが試験会場へ向かう途中、謎の夢を見る事になる。その夢の内容を要約すると、総司には力の素質があるとかそんな感じ。とある友人にだけはドＳになる。
両親は事故で無くしており、今は叔父の家で生活している。

注意をいくつか。

１、オリキャラ＆ａｍｐ；オリカ多数ですご注意下さい。
２、ある一人のＴＦキャラの設定をストーリーの展開上、大きく変更しております。
３、作者は文才ナッシングです。
４、不定期更新（出来れば更新する日を決めて行く予定）

以上の事が苦手な方は読む事をやめる事をお勧めしません。慣れて下さい。

悪いな、絶賛生中継中だ（前書き）

注意！

今回、初手エグゾ5枚より酷いチートドローがありますのでご注意を

悪いな、絶賛生中継中だ

「おら！とっととカードよこせ！」
どうも、鳴上　総司です。え～今俺達はチンピラ二人に絡まれてます。理由はいたって簡単。かつあげされてる子供を助けようとしたからです。んで、子供たちはなんとか逃がすのに成功して、で現在。

「いや～子供にかつあげってアンタら酷いっすね～」
何を思ったか悠が不良相手に挑発をしだした。やれやれ…めんどくさい事になりそうだ…

「あ？俺らはただ、カードを交換しようとしただけだぜ！この【ワイト】とな！」

【ワイト】…アンデッド族最弱のモンスターだが使い方によっては強くなるんだぞ？これは…ザコだな、こいつら。

「それを邪魔してくれよ～交換出来なかったじゃねぇか！」

「いやいや…【ワイト】と交換するカードって…まぁ…あるか？」

「使いこなせば結構強いらしいけどな」

【ワイト】が強いかどうか悩んでいる悠に軽く説明した。まぁ、実際【ワイトキング】っていう切り札がいるんだけどね。

「つーかおたくら、子供にしか交換する相手がいないなんて同年代の友達いなのか？」

「おい、悠！それがもし本当だったら失礼だろ！すみません…こいつ礼儀知らずなもんで…。友達はいるけどあれですよね？あなた達が弱いから交換してくれる相手がいないだけですよね？」
おっとと…口が滑ったか？

「何だと…」

「お前ら！本当の事言うな！兄貴が悲しむだろ！」

「おい！」

おいおい図星かよ…
「ぶっ！図星かよ！…くくく…ダメだ…ツボった…！」
次の瞬間悠が壊れたかのように笑い出す。するとどうだろう…弱い兄貴のほうの顔が赤くなっていく…

「う、うるせぇ！こうなったらデュエルしろお前ら！俺が強い事を証明してやる！」

「もし俺らが勝ったらお前らのデッキと金を懸けて勝負だ！」

「いいね。んじゃタッグデュエルな。ハンデとしてお前らのＬＰは４０００、俺らはＬＰ５００でいい」

「なめてんのか！？」

いやいや…弱いって言ったのあなたの子分でしょうが…

「ま、その代わり、先行は貰う。おい悠、デュエルの時間だ」

「くく…え？デュエル？しちゃう？言っとくけど、俺らは強いよ？」

「問答無用だ！行くぜ！」

「「デュエル！！」」

「完全に頭に血がのぼっちまってるな…。悠、お前が一番目な。」

「了解っと！準備完了だ！」

「「デュエル！」」

悠＆ａｍｐ；総司ＬＰ５００
不良グループＬＰ４０００

注意、タッグフォースルールです

「行くぜ！俺のターン！おっと…良い手札だな…。俺は【Ｅ・ＨＥＲＯプリズマー】を召喚！」

全身が水晶のようなヒーローが現れる。

【Ｅ・ＨＥＲＯプリズマー】
ＡＴＫ１６００

「プリズマーの効果を使うぜ！こいつは融合デッキに存在する融合モンスターを選択し、その素材モンスターをデッキから墓地に送る事でエンドフェイズまで、プリズマーはそのモンスターと同じ名前になる。俺が選択するのは【メテオ・ブラック・ドラゴン】を選択

し、素材モンスターは【深紅眼の黒竜】を選択！」

【Ｅ・ＨＥＲＯプリズマー】
ＡＴＫ１７００
「馬鹿な！？レッドアイズだと！？」

「あの超レアカードが何故！？」
え？何故孤児院の子供がこんなレアカード持てるかって？まぁ、簡潔に説明すると、悠がとあるギャンブラーにデュエルに勝って、あのカードと、孤児院に金を寄付させたんだ。

「お次に魔法カード【黒煙弾】を発動！【深紅眼の黒竜】が自分の場にいる時、相手に【深紅眼の黒竜】の元々のダメージを与える。よって、レッドアイズをコピーしているプリズマーの元々の攻撃力１７００Ｐのダメージを与える！」

「な！？ぐぅ…」

不良コンビ
ＬＰ４０００→２３００

「カードを３枚伏せ、ターンエンド！さぁ弱い兄貴さん、アンタの番だぜ！」

「うるせぇ！俺のターン！ふふ…良い手札だ…！」
何か良いカードを引いたみたいだな…どこまで足掻いてくれるか…

「【古のルール】を発動！手札からレベル５以上の通常モンスターを特殊召喚する！こい！【スパイラルドラゴン！】

ドラゴンと書かれているが海竜族だという可哀相な子が現れた。

【スパイラルドラゴン】
ＡＴＫ２９００

「ほーいきなり攻撃力２９００とはーすごいなー」

「うん、そうだねー勝てる気がしなーい」

「驚くのはまだまだぜ！もう一枚【古のルール】を発動！こい！
【スパイラルドラゴン】！」
…またかよ

【スパイラルドラゴン】
ＡＴＫ２９００

「まだまだぁ！【古のルール】を発動！来な！【スパイラルドラゴン】！」

【スパイラルドラゴン】
ＡＴＫ２９００

「どんな手札だよ！？初手の手札で同名カードが３枚揃うって！？
しかも２グループだし！」

「これは…なんとなく弱いっていう理由が分かったわ…」

「決めてやる！一体目の【スパイラルドラゴン】で貴様のザコモンスターに攻撃だ！」

「トラップ発動！【マジカルシルクハット】！デッキから魔法か罠をフィールドに二枚を表側モンスター一体と合わせてセットする！さぁ、どれを選択する？」

「真ん中だ！いけぇ！【スパイラルドラゴン】！」

【スパイラルドラゴン】が巻き起こした渦潮に一つのシルクハットが破壊される

「ふふ…ビンゴだ。破壊されたのはプリズマーだ」

「ふん！どの道全部破壊するだけだ！残りのシルクハットも攻撃ぃ！」

「おっと…あとの奴は通せねぇな～。【攻撃の無力化】だ！」

二体の【スパイラルドラゴン】の攻撃をバリアが防ぐ。

「はぁ？お前馬鹿じゃねぇか？」

「それはな、最初の攻撃で使うのが普通だろうが！このど素人が！」素人はお前らだよ。一見無駄に見える行為だが、決して無駄じゃない。

「これで俺はターンエンドだ！」

「エンドフェイズに俺の残りのシルクハットが破壊される。だが、破壊されたのは二枚とも【黄金の邪神像】だ！セットされているこのカードが破壊された時、【邪神トークン】を特殊召喚する！」

【邪神トークン】×２
ＤＥＦ１０００
ちなみにこのコンボ、セットされている【黄金の邪神像】攻撃対象になれば、表側表示になってしまい、効果が発動しない

「ふん！そんなザコモンスターを召喚してなんになる？」

「こうなるんだよ。俺のターン！二体の【邪神トークン】を生贄に捧げ、【火之迦具土】を召喚！」

頭が燃えている熱いモンスターが現れる。

【火之迦具土】
ＡＴＫ２８００

「更に【二重召喚】を発動！このターンもう一度通常召喚を行う！来い！【摩破羅魏】！」

【摩破羅魏】
ＡＴＫ１２００

「そんなザコばかり並べて、どうなるんだよ！」

「だからこうなるんだってば…。【死のマジックボックス】を発動！お前の場の【スパイラルドラゴン】を破壊し、俺の場の【摩破羅魏】をお前の場にコントロールを入れ替える！」

「あ！俺の【スパイラルドラゴン】がッ！」

いやいや…まだ二体いますやん…

「更にフィールド魔法【バーニング・ブラッド】を発動！全ての炎属性モンスターの攻撃力を５００上げ、守備力を４００下げる」

【火之迦具土】
ＡＴＫ２８００→３３００

「攻撃力を上回っただと！？」

「バトル！【火之迦具土】で【スパイラルドラゴン】に攻撃！紅蓮滅殺拳！」

不良グループ
ＬＰ２４００→１９００

「メインフェイズ２に移行し、悠が伏せていたトラップ【亜空間物質転送装置】を発動！【火之迦具土】をエンドフェイズまで除外する！」

妙な機械に【火之迦具土】は何処かへ転送させられた。

「カードを一枚伏せ、エンドフェイズ。お前の場にいる【摩破羅魏】はスピリットモンスター。よって俺の手札に戻る」

「何だと！」

「そしてもう一つエンドフェイズに【火之迦具土】は戻ってくる！」

「だがそいつもスピリットモンスターだろ！？早く手札に戻せ！」

「【亜空間物質転送装置】はあくまで場に戻す効果。スピリットは召喚したターンのエンドフェイズに手札に戻る」

つか初めにスピリットは特殊召喚出来ないから【亜空間物質転送装置】で戻すの無理じゃね？っていう疑問が浮かぶだろ？

「くそ…なめやがって…。俺のターンだ！」

「おっとその前に【火之迦具土】の効果で手札をすべて捨ててもらおうか」

「な…んだと」

哀れ子分…手札一枚でどう来る？

「【スパイラルドラゴン】を守備表示にしてターンエンド…」

何か子分が可哀相になってきた。

「俺のターン！確か…前のターンで総司が【摩破羅魏】出したから効果使えたんだよな…確認して…ブッ！…一番上に置く…」

いきなり吹き出す悠。よほど面白いカードを引いたと見た。

「くく…【死者蘇生】をはつど…プ…【スパイラルドラゴン】を蘇生…はっははは！！」

【スパイラルドラゴン】
ＡＴＫ２９００

「……」

何か不良グループがすっごい絶望した顔してるんだが。

「バトル…っク…【火之迦具土】で守備表示の【スパイラルドラゴン】を攻撃！」

必死に我慢しているな。笑いだすのを。

「これで…とど…プふッ…【スパイラルドラゴン】でダイレクトアタッ…ク…ははっはっははっは！」

「ちくしょうがあぁあああああ！！」

不良グループ
ＬＰ１９００→０

「ちくしょう！覚えてろ！」

デュエルに負けた途端全力疾走で逃げ出す不良グループ。腹を抱えて笑いだす悠。

「余計に腹減った…。笑ってないでさっさと行くぞ」

悠を無視して俺は歩き出した。

ーーーーーーーーーーーー

「なぁ、知ってるか？」

マックでハンバーガを頬張っていると悠が話題を振ってきた。

「女優の藤原　雪乃がアカデミアに編入するってニュース…」

「藤原　雪乃って今バカ売れしてる?。ってか、女優からデュエリストってどんな波乱万丈だよ…」

女優、藤原　雪乃。まだ俺達と同じ１５歳に関わらず女優。しかもその演技力は大人顔負けだ。更に言えば、一部の男どもからは絶大な人気を得ている。

「ゆきのんと一緒に授業受けるかもだぜ?楽しみだよな～。だってよ～あのゆきのんだぜ?愛華と同じ年でアの身体だぜ?」

ゆきのんって何だゆきのんって…こいつはあれか?藤原雪乃の熱狂的なファンか?

「その言葉、愛華に報告してやろうか?悲しむだろうな～。あんな告白までしておいて結局は有名人をとるなんてな。同じ男だけど、軽蔑するね。一応聞くけど、そのゆきのんのどこが好きなんだ?」

「そりゃあれだよお前!あの豊満な胸!あれは最高だね!あとは脚のラインかな!あとはあの色っぽい声!あれでイケるかもだわ～。それから…」

前回、こいつの性格を友達思いと説明したが訂正する。こいつは正真正銘の変態だ。超がつくほどの…。

だが悠よ。残念だがお前の変態を直すためにある人物を呼ばせてもらおう…

～5分後～

「…どうだ！これが藤原雪乃の魅力だ！」

そう言って悠はジュースを飲み干す。だが悠が長く語ってくれたおかげで準備が整ったようだ。

「ゆきのんの魅力は十分分かった。お前はあれかゆきのんのような胸を持っている女性が良いのか？」

「まぁな！愛華もまぁ…あれだけど、きっと大きくなるはずだって！」

「そうかそうかー。という事らしいです。愛華さん」

「へ？あ・・・い・・か？」

俺は悠の後ろに立っている愛華にそう言うと、つられて悠も後ろを見る。するとなんという事でしょう！悠の顔がドンドン青ざめて行きます。

「そうですかー。大きい方が良いですかー。すみませんねーこんなまな板でー」

そう、この喋りかたの女の子が悠の恋人、山岸　愛華だ。特徴と言えば、銀色の長い髪だろう。んで、今はかなりお怒りの様子だ。何でそう思ったかって？黒いオーラが見えるからさ！

「愛華！？何でここに！？」

「すまないな悠。絶賛生中継中だ」

そう言って俺は通話状態のケータイを見せる。相手は勿論愛華だ。

「にしても早かったな愛華。用事があったんじゃないのか？」

「偶然近くを通りかかっただけですよ。それより、ご連絡有難う御座いました。」

「気にするな。それより、悠はお前と藤原　雪乃についてお話がしたいらしいんだ」

「奇遇ですね、悠。私もあなたと話したい事が山ほどありますので！。そうだ！悠！これから出かけましょう！二人で！」

「ふ、二人！？で、でも総司がかわいそう…」

「気にするなって悠。俺のなんかより、彼女の事を大切にしてやれ」

でも…もしかしたらここで別れたら悠と二度と会えないかもしれない…そう考えると何でだろう…胸が苦しくなる…。

「ハンバーガーが美味い…」

「おい！何悲しそうな顔して俺のハンバーガー食ってやがる！」

「え？だって二人で出掛けるんだろう？愛華は今すぐにでも出掛けたい顔してるし、でもお前が行ったらハンバーガーが勿体ないだろう？」

「流石総司君！友人の事をこんなに大切してるなんて！」

「どこが大切してんだよ！どこもしてねーだろうが！！」

「悠よ…ハンバーガーの事は気にするな…俺が責任を持って食いきってやる…だからお前は…愛華と一緒に…行くんだ！」

「総司君！！！」

「何『俺が盾になるから先にいけぇ！』みたいな雰囲気出してんだよ！俺は嫌だだからな！絶対嫌だからな！」

悠め…そんな大声出さないでくれ…子供が「ママーあのお兄ちゃん、大声で嫌だ嫌だって言ってるよー」と母親に言うと「シッ！見ちゃいけません」と言われる始末だ。

「じゃ行きましょうか」

「助けてくれ！総司！お前が招いた種だろう！」

「…そっとしておこう」

「そっとしないでいいから助けてぇえええ！」

「そんな大声を出して恥ずかしい…さっさと行きますよ！」

愛華が悠を睨みつけると、悠は大声を出すのをやめた。あれだなー悠は嫁に逆らえない夫になるだろうなー

「それでは総司君！ご迷惑をおかけしました！」

「んー気にするな。じゃ二人でごゆっくり」

「っく…総司…」

何か悠が言いたそうな顔をしているが、俺は無視した。二人は店を出て行った。

「…ハンバーガー美味いな…」

悪いな、絶賛生中継中だ（後書き）

今回の最強カード
「火之迦具土（ヒノカグツチ）／Ｈｉｎｏ－Ｋａｇｕ－Ｔｓｕｃｈｉ》　†
スピリットモンスター
星８／炎属性／炎族／攻２８００／守２９００
このカードは特殊召喚できない。
召喚・リバースしたターンのエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。
また、このカードが相手ライフに戦闘ダメージを与えた時に発動する。
次のターンのドローフェイズのドロー前に相手は手札を全て捨てる。

総司「今回はこのハンデスなら最強の効果を持つモンスターだ。その代わりスピリットモンスターだからな折角苦労して出してもエンドフェイズに手札に戻ってしまう。工夫をして使おう！」

かませキャラは基本性格が嫌だ（前書き）

今回デュエルはありません。会話中心です。

かませキャラは基本性格が嫌だ

「あれがアカデミアか…」

船から見えるデュエルアカデミア…俺達が今日から3年間、生活するところだ。

試験は無事合格。俺と悠はオシリスレッド、愛華はオベリスクブルーだ。この階級的な物はブルーが一番、イエローが二番、レッドが最下位といった具合だ。ちなみに女子は絶対にブルーみたいだ。

「しっかし意外だよなー」

「何が？」

「お前の実力なら、イエロー余裕だったんじゃねえの？実技試験の番号９０番って…どんだけ筆記試験間違えたんだよ」

島を眺めていると、悠が疑問を浮かべながら訊いてくる。筆記試験？そう言えば点数が関係してくるだったんだっけ？

「まぁ…あれだったら余裕だったけどな。でも、レッドの方が面白いだろ？」

「…面白い？どういう意味だよ？」

「そのまんまの意味だ。下剋上だよ、下剋上。レッドがオベリスクブルーに入ってる奴らをたたきつぶす…面白いだろ？」

「…まぁ…面白そうだけど…でも、ブルーは一番強いクラスなんだろ？それって結構難しいんじゃないか？」

「ブルーは中等部からしか入れない。中等部から入学するには結構な金がかかる。つまり、ほとんどが金の力で買ったカードとかでデッキを作ってくるはずなんだ。」

「それがどうしたんだよ？」

まだ分からないのか。こいつは。

「だから、金持ちはとかは多けりゃいいっていう考え方がほとんどだ。つまり、攻撃力の高いカードばかりで固めてくるはずなんだ。攻撃力の高いカードってのはほとんどが通常モンスター…ここまで言えば分かるな？」

「…つまり、なんの考えもなしに、攻撃力の高い通常モンスターで固めて、効果モンスターが少ない。って事は戦略の幅が狭いってことか？」

「そんな感じだろうな。あとは魔法や罠の対策を考えれば、完封も可能だ。でもこれはあくまで予想だし、きっと強い奴も居るはずなんだ。だから結局はやってみなきゃいけない分からないって事だ」

例えば、【サイバードラゴン】を使ってくるカイザーがそのいい例だな。

「やっぱお前は敵に回したくない奴だよな…」

「…これはただの推理だよ。それに、最終的には自分の実力がいる

しな。相手が自分の推理どうりできても、自分が強くないと勝てない。」

「自分強くするために、アカデミアで授業を受けるって事だな」

「まぁ、そんな感じだ」

とは言ったものの…正直いってアカデミアの授業は当てになりそうにないんだよな…スピリットはただでさえ、使うのが難しい。そのせいか使う人は少ないし、プロデュエリストでも使う人は一人しか見た事がない、って事は授業ではやらないんだろうな…。

そう言えば愛華がいないな…。

「そう言えば愛華にフラれたのか？」

「は！？どうしてそうなんだよ！」

「いやだって…一緒じゃないし…ってか悠！お前生きてたのか！」

「勝手に殺すな！愛華は…同じブルーの女子生徒と一緒に話してるよ」

「悠の幽霊よ…どうか、地獄に帰って下さい…」

「人の話を聞けぇ！それに足があるから幽霊じゃないだろ！」

「きっと最新鋭の幽霊なんだろ！！」

「いねぇよ！そんな幽霊いねぇよ！絶対いねぇよ！」

「ハッ！幽霊が喋ってる…だと…！？」

「もうつっこむのもめんどくさいわ！」

そんなくだらないやりとりをしているとアカデミアの島に着いた。

ーーーーーーーーーー

長い…長すぎる…校長の話…。でも…やっと終わった…！この解放感半端じゃない！じゃ早速、レッド寮へ…！

ブルー寮があんなに綺麗だったんだからきっと綺麗なはずだ！

だけど、俺達を待っていたのは……ぼろいアパートだった。

「…これは酷い」

「…これなら孤児院の方がまだましだ。」

なんだこの差は！天と地程の差だぞ！

「…決めた」

「…総司？」

「絶対下剋上してやる！レッドの寮を豪華にしてやる！」

「おう！俺も協力するぜ！じゃあさっそくブルーの奴らを…」

「寝る」

「は…？」

もうね…眠いの。校長の話で眠たさが半端じゃないの。うん。

「えっと部屋はっと…あ？悠と一緒か…」

「まぁ、俺らだけか…ま、初めての奴らより、楽だけどな」

「じゃ、お休み」

俺は指定してあった部屋に入った。

「おい！…ったく、どうすっかな…」

ーーーーーーーーーーーー

？？？Ｓｉｄｅ

「…うわあああああ！」

研究員Ｆ

ＬＰ２０００→０

「全く…弱過ぎ！暇つぶしにもならない！何？６人できて私にＬＰを１も削れないってどういう事！？」

私は今、妹がデュエルをしていたのを見ていた。結果は妹の圧勝。

６人相手に関わらず。

「まぁいいや…じゃあ敗者にお仕置きの時間よ…。はりきっていきましょう！おしおきターイム！」

研究員たちの後ろのモニターに文字が表示される。

エキストラ６メイがハイボクしました
おしおきをカイシします

「うわぁあああなんだこれ！？」

研究員６名の足が手錠のような物で固定される。エキストラ達がはずそうとするが外れない。更に、研究員達の地面が動きだす。

「う…わあああああ！」

後ろを見た研究員の一人が叫び声があげる。後ろに会ったのは…巨大な拳だ。重さは多分…凄く重い。

【スクラップ・フィスト】
Ｓｃｒａｐ　Ｆｉｓｔ

そうモニターに表示され、拳が地面へと打ちつけられる。離れていても地響きが凄い。

「いやだぁああ！！！死にたく…」

ぐしゃああ！！という生々しい音と共に研究員は潰される。拳には

大量の赤が着いている。普通の人間なら吐くか、気絶するか、おかしくなるかのどれかだろうが、血に慣れてしまった自分は平気だった。

「あはは！断末魔素敵だったよ！」

妹が狂ったかのように笑いだす。

「あれ？お姉ちゃんいたの？」

「ああ…」

「あの子…ちゃんと脅せた？」

「ああ…」

「そう！良くやってくれたわ！」

妹が嬉しそうに私に抱きついてくる。

「でもね、お姉ちゃん。裏切るとかやめてよ？」

「分かってる」

「だよねー！んじゃ！学園生活頑張ってね！私はここで監視するんだから！」

「分かった、分かった」

「あと、ちゃんと、夜には来てよ？」

「はいはい…じゃあ私は戻るぞ。」

「はいはーい」

私はこの場を立ち去った。

「残姉(ざんねぇ)…待っててよ…あなたもすぐに…ふふ…あはははは！！」

ーーーーーーーーーーーー

Side　悠

「暇だ…」

総司はすぐに寝たし…愛華は何処にいるかわかんねぇし…。どうっすかな…

「なぁ。アンタ暇か？」

悩んでいると誰かに声をかけられた。一人は茶髪の男、もう一人は水色の髪の男の子だった。

「超がつくほど暇だな」

「んじゃ！デュエルしようぜ！俺は遊城　十代！」

「僕は丸藤　翔ッス！」

「俺は有里　悠な。デュエルか…良いぜ！やろう！」

「んじゃ！早速…デゅ…」

「ちょっと、待て」

「どうかしたっすか？」

ここでやるのはまずい…総司の奴は起こされると凄く機嫌が悪いからな…

「場所を変えよう。確か…デュエル場があったはずだ」

「ここでもいんじゃ…」

「んじゃ行こうか」

翔を無視してデュエル場へと向かった。

「よーし着いた。行くぜ十代！」

「おう！」

「「デュエ…」」

「ちょっと待てよ」

俺と十代がデュエルしようとするが誰かに遮られてしまう。遮ったのはオベリスクブルーの奴らだった。

「ここはお前らの様なドロップアウトボーイの来る場所じゃない！

さっさと帰れ！」

はぁ…やっぱりあるのな、こういう差別が

「シラネ。十代やろうか」

「おう」

「「デュエ…」」

「何だ騒々しい！」

「万丈目さん！」

なんだあれ？鳥頭？」

「十代…あれ知ってる？」

「いや…誰？」

十代も首を傾げる

「貴様ら万丈目さんを知らないのか！！」

「知らんね、そんなかませキャラ」

「かま…！貴様！いい度胸だな！来い！俺がデュエルしてやる！」

俺とかませがデュエルしようとするが…

「あなた達何やってるの？」

「て、天上院君！」

また遮られる。今度は金髪の女性でスタイルが…おっと、また愛華に半殺しにされるな。

「い…いや…ちょっと…チィ…お前ら！帰るぞ！」

「「え…は、はい！」」

舎弟共を連れて帰る万丈目。

「ダメよ。あいつらの挑発にのっちゃ。私は天上院明日香よ」

俺たち3人も自己紹介する。

「これからは気をつけなさいよ。じゃあね」

明日香もデュエル場をあとにする

「き、綺麗っす…」

翔よ。その意見には激しく同意だ。だけど口にしたら殺される気がする。

「んじゃ帰るか…」

「ちょ…デュエルは！？」

「なんか冷めた…。帰る」
俺もデュエル場をあとにした。

ーーーーーーーーーーーー

ＰＤＡが鳴る。うるさいな…ったく…

ドロップアウトボーイ！午前０時にデュエル場にこい！アンティ勝負だ！Ｂｙ万丈目

アンティか…総司の言ったと通りなら下らんカードばかりっぽいな。

「ん～」

総司が目を覚ます。まだ半分寝ぼけてるようだ。

「ふぁ～いま何分何時？」

「１０時な。結構寝てたな」

「顔洗ってくる…」

さて…どうすっかな…。

考えこんでいると、十代達が来た。どうやら十代達も俺と同じメールが来たらしい。

「どうするっすか？兄貴」

「勿論行くぜ！お前も行くだろ？」

「当然！」

「その話俺も混ぜろ」

顔を洗ってきた総司が話に入ってくる。

「誰っすか？」

「俺は鳴上　総司だ」

十代達も自己紹介する。

「で、どういう話だ？」

ーーーーーーーーーー

Ｓｉｄｅ　総司

しくったな…そんな話があるなら起きてついていくべきだった…くそ！

しかし…ブルーの強さを確かめるいいチャンスだな。

「俺も一緒に行こう」

「ああ、別に良いぜ」

「そろそろ行っとくか」

アパートを出て外に出る。やっぱり海の近くからか風が冷たい。

「ん？」

灯台の方に人影が…あれは…髪の長さから女子か…？

「悪い。用事出来た。先に行っててくれ」

「おい！」

流石にこの時間で女のこ一人はまずくね？しかも海の近くだから身投げ…はないよな流石に。

灯台に着くといたのは、薄紫のツインテールの少女だった。てかちょっと待て。こいつはたしか…

「藤原雪乃？」

俺が名前を呼んだからか、藤原がこちらを見る。

「誰？そして何？」

「俺は鳴上　総司。こんな時間にこんなとこにいたら風邪ひくぞ」

「別に、あなたには関係ない」

なんだか機嫌が悪そうだな…あれか？悠のような奴に追いかけられてたのか？

「私をナンパでもしに来たのかも知れないけど、私、そんな軽い女じゃないし、こう見えて貞操とか大事にしてるし」

「はい？いやいや…俺そんな事期待してないし。普通に心配しただけんだけど」

「どうでしょうね。男って皆野獣だしね」

「皆は言い過ぎだと思うけど…」

「だから私もそう言うの追い払うのに苦労してるのよね」

まぁ、確かに、女優だからストーカーとかに苦労してるんだろうな

「藤原は女優だし、モテそうだしな」

「モテそう…？」

ん？モテそうって何か地雷踏んだか？

「ふふ…あなた良い目をしてるわね。あなた名前は？」

「鳴上　総司だけど…」

「分かってる、うん分かってる鳴上」

「な、なにが…」

「今度あなたに友達紹介しましょうか？鳴上は…草食系っぽいから…肉食系女子とかが合うかしら？」

「いや…ちょ…」

「じゃあね…一人で戦場を走りまわってそうな子とか？」

「凄い子だなそのこ…」

女の子で戦場を走り回ってる子って実在するもんかね…

「ふふ…あなたの事気にいったかも…じゃあね」

藤原は走って灯台をあとにする。

「…色々と凄い奴だったな…」

女優なのにモテそうで反応するってどうなんだ？

「そう言えばデュエル場いかないと…」

俺はデュエル場へと走った

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8006y/

遊戯王　アルカナソウル

2011年11月27日13時50分発行